



企業プロフィール

- 設立：1923年
- 事業内容：「文藝春秋」「オール讀物」「文學界」「週刊文春」「Sports Graphic Number」などの発行、単行本・文庫・新書・全集の刊行、電子書籍事業など
- 従業員数：340名（2015年4月現在）
- 年次有給休暇の取得率：32.9%
- 年間休日数：122日
- URL：http://www.bunshun.co.jp/

リフレッシュ休暇



リフレッシュのための休暇制度

# 15年に1度のリフレッシュ休暇で心の洗濯を図る

ポイント

- ① 特別な長期有給休暇という1度きりの機会を提供する
- ② 権利取得者へは通知を行い100%の認知を得る

作家・ジャーナリストである菊池 寛が私費で創刊した雑誌『文藝春秋』が、同社の原点だ。小説家としての成功とともに実業家としての手腕を発揮し、日本文藝家協会の設立や芥川賞、直木賞の設立など精力的に活動し、今日に至る日本文学界の礎を築き上げた。また、総合週刊誌『週刊文春』やスポーツ誌『Sports Graphic Number』など、それぞれの業界でトップクラスの人気を誇る定期刊行雑誌も生み出し、発言力のあるメディアとして知られている。

一般的に出版業の勤務体制は不規則であることが多いが、文藝春秋社も例にもれないと総務部長の佐々木直彦さんは話す。従業員の心と体に無理がかからないよう、さまざまな工夫を凝らしているというが、今回はそのうちのひとつであるリフレッシュ休暇について話を聞いた。

## 時代を先取って1991年からリフレッシュ休暇をスタート

特別な休暇制度のひとつであるリフレッシュ休暇は、1991年4月から導入されました。当時は、こうした法定外の休暇制度を採用する企業はあまり多くない時代だったと思いますから、革新的なものだと思います。現在の社風と共通していますが、新しいもの

を積極的に採用しようという動きが背景にあったようです。

このリフレッシュ休暇の中身ですが、勤続満15年を迎えた従業員に対して、長期有給休暇を付与するというものです。日数は原則として連続10日。土日を含めて、2週間強の休暇とすることができますし、年次有給休暇を取得すれば、さらに伸ばすことも可能です。また、同制度利用者には、休暇に入る前に一般社員で

15万円、副部長以上のいわゆる管理職で20万円の報奨金も付与されますので、休暇中の活動の原資に充てていただけます。

勤続15年度となる前の12月、該当者に向けてリフレッシュ休暇の権利を取得したことを通知し、あらかじめ申請書を提出してもらっています。原則として権利を取得した年度に利用してもらうものですが、利用できなかった場合は、次年度以降へ無制限に繰り越すことも可能です。実際、ほとんどの従業員は権利取得年度に消化していますが、使わずに取っおいている人もいます。利用する場合は、書類を届けた12月に申請してもらうことが望ましいですが、業務に支障がなければ、直前の申請でもかまいません。

## 長期の休みを取ることで仕事への取組みを見つけ直すきっかけに

リフレッシュ休暇の申請書には、利用目的を記入する欄が設けてあります。これは利用動向を調査するためのものであり、目的如何によって休暇取得の可否を条件付けるものではありませんが、これまでの記入内容を見ますと海外旅行などを満喫している従業員が多く見受けられます。渡航に時間も費用もかかるような場所ですと、この休暇制度のように長い期間がなければ旅を楽しめませんから、絶好の機会になっている



お話を伺った佐々木総務部長

ようです。ちなみに私自身は、普通免許を取得するために自動車教習所の合宿に参加しました。免許を取るきっかけがないまま社会人になってしまい、仕事が忙しくて教習所に通うことができなかったので、ちょうどいいチャンスでした。

リフレッシュ休暇の導入から20年以上も経っていますから、制度の存在自体、特別のものではなく、当然の権利として受け入れられています。しかし勤続15年となると、業務の中核として活躍している従業員がほとんどです。彼らそのタイミングで一旦仕事から離れ、心身ともにリフレッシュして、仕事に対する思いや意欲を新たにすることは、当社にとっても大きなメリットがあると考えています。

私たちが相手にしている社会は日夜動き続けていますので、就業時間は不規則になりがちです。それでも適切な就業体制を築いてもらうべく、できるだけ休日出勤を減らし、かつ年次有給休暇の取得率を向上するよう働きかけています。リフレッシュ休暇は1度きりの特別な休暇制度ですが、休みを取ることの大切さを気づかせるきっかけともなれば良いと考えています。

休暇制度利用者の声

私がリフレッシュ休暇を取得したのは、入社19年目の2014年でした。15年目は業務が忙しい部署にいたためタイミングを逃してしまいましたが、異動してから活用しました。同制度のことは入社時から知っており、趣味のバイクで長旅に出るという当時の夢を実現できました。排気量800ccの大型バイクにまたがり、茨城県の大洗からフェリーで北海道の苫小牧へ。反時計回りで道内を一周するうち、縁結びの神様に会いに行こうと決心し、本州を通過して島根県の出雲大社へ。四国経由で本州へ戻り、せっかくならと伊勢神宮にもお参りへ。そして紀伊半島を回ってから東京へ戻りまし

た。8日分の年次有給休暇を合わせて計25日間のバイク旅行で、この間は楽しいことしかありませんでした。理解のある上司で、旅に集中できました。また、旅先でさまざまな景色を目にしなが、仕事や自分の人生についても思いを巡らしました。これまで仕事ばかりでしたが、自分の生活や趣味を充実させることで、仕事にもハリが出るのではないかと、目に見える変化があったわけではありませんが、リフレッシュ休暇が折り返し地点となり、次の区切りである定年に向けて気持ちを切り替えることができたと感じています。

(文春文庫部 Mさん)